

県南房総思考 Vol.7

特集：南房総の花づくり

南房総の市民の皆さま、あけましておめでとうございます。今年も県南思考はさまざまなテーマに切り込んで、南房総の諸問題をわかりやすくお伝えしていきます。さて、2011年、最初のテーマは南房総ならではの花づくりにスポットをあてました。今年も年末年始のお休みを利用して、たくさんの観光客が花摘みに訪れています。花卉栽培は南房総を支える大切な産業のひとつです。今号は、そんな花いっぱい、春先取りの特集をお届けします。

進化する花卉ビジネス



特集：南房総の花づくり

結びの対論

亀田県議 × 秋山県議 × 木下県議

**厳寒期だけでなく、
通年で花の南房総をアピールしていく、
その取組みが必要でしょうね。**

亀田 今日、園芸農家のハウスでも、沖見屋さんのお座敷でも、中へ入った瞬間になんともいえないかわいしい香りがしたでしょう。花は目で見るだけでなく、香りでも楽しませてくれる。花に接している心が安らぎますね。

秋山 仕事柄、地方へ視察に出かけて、ホテルなどへ帰ってくるとロビーに大きな花が飾られている。不思議なもので、花といふのは、食べられるわけでもないのに需要がある。私たちは花と共に生きているといってもいい。

木下 今日はハウスを中心に栽培の現場を見たわけですが、南房総では、もちろん露地栽培も盛んに行われている。というより正確に表現すると露地でも収益を上げられるのが南房総の特長ですね。

亀田 ハウスにすれば台風が来ても安全で、さらに生産性が上がるはずですが、露地で作っているのは主に経費の関係なんですか。

秋山 ハウスを建てるとなったら、建築費だけでもたいへんです。それに固定資産税も上がりますから、負担が大きい。事業として、そうしたコストをかけて、なおかつそれ以上に利益の上がるものを作らなければならない。

木下 そうしてがんばっている農家も多いわけですが、一方で、南房総では風の心配さえすれば、真冬でも露地で花を栽培することができる。白浜方面は黒潮の関係で、どんなに寒くても霜が降りませんからね。他の県の栽培農家から見たら、うらやましいと思いますよ。田んぼや畑の、ちょっと空いた土地で、おじいちゃん、おばあちゃんが花を作って、おこづかいを稼ぐなんてこともできるんです。

秋山 そういえば食用花というんでしょうか。県のプロジェクトとして進められている農産物に付加価値をつけた商品の開発で、新しいジャンルとして「食べる花」にも成果が出てきました。具体的には花のシャーベット、ゼリーなどの新商品を若い世代が開発している。観光客向けにレストランやお土産屋で提供しているんですが、人気を集めているようです。見る、香りを楽しむだけではなく、新しい花の楽しみ方ですね。

木下 千倉の方では切り花のオーナー制度が人気を集めているようです。畑を一定区画に区切って、それをごく安価で首都圏のオーナーに提供。花を育てたり、管理するのは農家やって、オーナーは摘み取るだけでいい。

亀田 それなら花を育てたことのない都会の人でも、どっさりとする季節の花を手にすることができますし、農家にとっても、冬の時期に

遊ばせている土地を使って現金収入を得ることが可能になりますね。

木下 こうしたプランも、露地栽培が可能な南房総だからこそなんですよ。

秋山 本来、稲作だけの農家では農機具を揃えるだけでもたいへんで、農地の保全を考え、周辺農家に迷惑がからないように兼業農家として稲作し、農機具の代金を給与から繰り入れているというのが現状です。お米を作ったあとで花卉、野菜類を生産して、通年で収益があがるようにすれば専業で後継者が育つんですが。

亀田 西岬の皆さんはストックを年に2回作って、その合間にひまわりを作って、休みなく働いていらっしゃる。

木下 花がきれいなのは、それだけ人間が一生懸命、心をこめて作るからなんですよ。ただ、手をかけたらかけた分だけ、返ってくるものも多い。

秋山 一年働いて得られる収益は田んぼや畑より、かなり多いはずですよ。

亀田 花卉産業は南房総にとって大きな産業です。収益があがらないと若い人のなり手がない。次の世代が育ちません。

秋山 今は土地を借りても農業者になれるようになりましたから、まず借りた土地で経験をつんで、次に農地を買ってということもできるようなった。ただ、問題は機械貧乏になってしまう点ですね。JAさん主体で建設業界のように機械がリースできるなら負担が減るはずなんですが。

亀田 年が明けて、たくさんの観光客が南房総へ花を求めてやってきて、にぎわうシーズンが始まりました。いまや春の花摘みは地域を代表するイメージになりましたね。

木下 南房総は観光そのものかなりの部分、花に負っていますが、まだまだこれは伸ばすべきだと考えます。他の土地にはない大変なメリットです。それをいかした観光地にするためにも、フルシーズン、花がある場所にする必要がある。冬場だけの、限定された花畑ではなくて、通年型の花の南房総にするために、生産者の意見を聞きながら、JAに協力しながら、県に要望しながら進めていくべきではないでしょうか。

秋山 これからの農産物は外国との競争力がなくて生き残っていけないはずです。成田も近いので、輸出できるようないいものをつくって、ますます花の南房総を高めていって欲しいですね。



秋山 光章（あきやま みつあき）
館山市選出
昭和21年9月21日生まれ



事務所 / 〒294-0045 館山市北条 2570-11
TEL: 0470-23-5252 FAX: 0470-23-5251
http://akiyamamitsuaki.jp/
e-mail: ohshimiz@poppy.ocn.ne.jp

木下 敬二（きした けいじ）
南房総市・安房郡選出
昭和23年5月17日生まれ



事務所 / 〒295-0005 南房総市千倉町牧田 164-1
TEL: 0470-44-4111 FAX: 0470-44-4112
http://kishita.awa.jp/
e-mail: kishita@awa.or.jp

亀田 郁夫（かめだ いくお）
鴨川市選出
昭和27年2月16日生まれ



事務所 / 〒296-0041 鴨川市東町 665
TEL: 04-7099-0190 FAX: 04-7099-0191
http://www.kameda190.com/
e-mail: ikuo-k@leaf.ocn.ne.jp

県南思考 Vol.7

発行：2011年1月1日
制作：「県南思考」制作委員会
編集：式守編集工房
デザイン：野村友紀

南の風を県政に。南房総選出の県議による「県南思考」は市民の皆さまとともに、県南のあるべき姿を追い求めています。本紙をお読みになった感想、ご要望、その他ご意見は各県議の事務所までお気軽にお寄せください。



ストック栽培のハウス前で。
（左から）亀田県議、木下県議、
栽培農家の山崎一正さん、
山田滋さん、山田敬美さん、
秋山県議



●沖見屋
〒299-2715 南房総市和田町下三原 393
0470-47-2050
http://www.eyes-net.ne.jp/okimiya/
南三原駅より徒歩約 20 分。和田の南でとれる新鮮な魚介を使った
磯料理が自慢の割烹旅館。夏には地元産の磯ガキや鮎料理が味
わえる。なかでも鮎はステーキ、竜田揚げ、さしみ、たたきとバ
リエーション豊か。



せん。小さな旅館です」と、活ける手を休
めて語る女将の久保田さん。
「でも、お客さまをおもてなしをする心だけ
はどこにも負けないつもりです。そう
した宿のいたらない部分を南房総の花たち
が補ってくれているのかもしれないね」



ＪＡにおたずねします。

ＪＡ安房

なぜ南房総でこれほど花づくりが盛んになったのか、どんな
花が首都圏のマーケットで人気を集めているのか、さらには
観光花摘みの背景など、素朴な疑問をＪＡに聞いてみました。



（左から）ＪＡ安房営農販売課 / 栗原さん、営農指導センター長代理 /
長谷川さん、秋山、木下、亀田の各県議

南房総で花づくりが盛んになった背景 にはどんな理由があるのでしょうか

まず気候ですね。黒潮の関係で真冬でも温
暖な気候に恵まれている。千倉や白浜では
冬でもまったく霜が降りません。地形も関
係しています。南に向かって海に接し、北
に山を背負っているため陽あたりがよく気
温がさがりません。しかしながら圃場が狭
い。その狭い中で高収入を上げるには何が
適しているだろうと考えて花卉栽培が盛ん
になっていった背景があります。もうひと
つはマーケットですね。首都圏という最大
のマーケットに隣接しているため、鮮度の
高い花々を供給できる。この立地条件は大
きいと思います。

いま、園芸農家の方はどれくらいい てどんな花を栽培しているのでしょうか

ビニールハウスを構えて大々的に栽培して
いる方から、畑の空いている土地でおばあ
さんがひとりで花を育て、道の駅などで売
っているケースも含めていろいろですが、こ
ろ大ざっぱに言って、2,000戸弱といったと

ころでしょうか。花の種類もエリアごとに
いろいろで、それぞれ得意なものを作って
います。キンセンカ、ストックなどは出荷
量も日本一ですし、鴨川や鋸南では水仙も
盛んです。最近は金魚草、ペコニア、カラ
ーといった品目にも取り組んでいます。キン
センカは東日本のシェアで、ほぼ100%。千
葉県の南房総が主な産地です。他のエリア
では、ビニールハウスなどで暖房をたいて
加温すれば出荷可能ですが、燃料費などの
コストがかかって採算が取れない。やはり
温暖な気候が栽培を可能にしていると思い
ます。

観光客に人気がある花摘み、 観光農園も盛んになってきました

1月、2月の厳寒期には、首都圏からたく
さんの観光客がお見えになります。観光花摘
みがブームになったのは平成になってから
で、実はまだ歴史は浅いんです。本来、園
芸農家にしてみれば同じ花を作るなら、い
つ来るかわからない観光客を待っているよ
り、出荷に回した方がメリットは大きい。
ベストなタイミングで出荷できますし、着

実に収益が期待できますからね。ただ、海
を眺めながらのドライブを楽しんで、そこ
にあふれるほど花が咲いていれば首都圏の
観光客を魅了できる。とくに、厳寒期はな
おさらです。そんな背景から少しずつ取組
み農家が増えてきて、今日のように盛ん
になりました。米を作り終わって、冬の時期
に露地花を育てる。効率よく土地が利用で
きるのもメリットは大きい。ただ露地花な
どは高齢者が多いですから、やはり次世代
の担い手を育てることが必要ですし、売れ
る商品の開発をコンスタントに進めること
も重要だと考えています。

●主な生花の産出額と国内シェア

花の種類	主な産地	産出額	全国シェア
ストック	南房総 館山	9億円	47%
洋らん	南房総 富津	7億円	14%
キンセンカ	南房総	3億円	99%

進化する花卉ビジネス

育てる人も、活ける人も、
ていねいに心をこめて。
だから南房総の花は美しい。

南房総市和田町で100年以上も暖簾を継
いできた割烹旅館「沖見屋」。

玄関の襖に活けたあざやかな花が訪れた
客を迎えています。
「南房総といえば皆さんがイメージするのは
お花でしょう。まずおもてなしはここから
と思ひまして」と、女将の久保田くに子さん。
「どこかの教室で正式にお花を習ったわけ
ではないんです。まったくの自己流でお恥
ずかしい限りなんですが」と、謙遜される久
保田さんですが、「わたしなりに季節感を大
切に、心をこめて活けています」。

春は里山へ入って花をつけたばかりの野
草を摘み、夏は一転、ススキで季節を先取
りして涼しさを表現。秋は紅葉にあざみな
どをあしらひ、冬になればまさに百花繚乱、
地元でとれる露地花の数々が色を競います。
「お泊まりはもちろんですが、私どものと
ころでは宴会のお客さまも少なくないん
です。ご近所の園芸農家の方々のお集まり
にご利用いただくこともあります。そんな
ご縁でどうか。規格外で出荷できないから
持ってきたよ、なんて言いながら下さる
ことも多いんです。南房総で旅館を営んで
いるからこそでしょうね」

人気種を作る綿密なリサーチ

その沖見屋からほど近い江見にある園芸
農家のハウスでは、出荷を目前にした百合
の手入れに余念がありません。

ハウスの中は春のようなあたたかさ。
「真冬でも、暖房費がかからない。つまり生
産コストを安く抑えられる。それに首都圏
が近いので、鮮度を保ったまま市場に出せ
る。当然、価格にも反映してくるわけで、
それが南房総で花を作る最大のメリットで
しょうか」と、農家の方々は声を揃えます。
江見といえばテッポウユリがブランドと
してすっかり定着し、コンスタントに需要
が期待できるようになりました。
「ほかには、贈答用の高級花として知られる
カサブランカ。新種の開発にも積極
的に取り組んでいます」

花屋のショーケースに飾られる
と、どれも同じように見える百合
ですが実は流行があって、花の色、
形、サイズ、全体のバランスなど、
首都圏の消費者の嗜好によって微
妙に売れ行きが違ってきます。そ
れに合わせて花を生産し、出荷
するのが、いわば園芸農家の腕の見
せどころ。
「種苗店の情報、もちろん」Ａか
ら情報が入ってきますが、実際
にどんなものが売れ筋になってい
るか自分の目で見てみなければわから
ない。ですからそれを調べに、東京の大田市
場へ行ったり、あるいは懇意にしている花
屋さんをのぞいたりしています」

そうしたマーケティング調査は江見の園
芸農家に限りません。
館山市西岬（にしざき）といえば、ストック
の出荷量が多いところ。
最近、西岬では初夏に出荷
する小さなサイズのヒマワリ
が開発され、ヒット商品とな
りました。

盛夏に人の背丈より伸びて
大きな黄色い花を咲かせるヒ
マワリですが、その大きさの
ためか、なかなか家庭で花瓶
に活けようと思っても扱いが
むずかしく、消費が限定され
ていました。

そこで、手のひらほどのサイズで花を咲
かせ、茎の高さも短かめのひまわりを市場
に出したところ、小ぶりであらゆる形が首
都圏の消費者の心をつかみ大ヒット。人気
商品となったのです。
「メイン商品であるストックはコンスタント
に需要がありますから、その合間に、こう
した売れる花を作っていく。土地を遊ば
せずにハウスをフル回転させて収益を上げ
ることができるわけで、こうしたリサーチは
重要ですね」



繁田仙三さん(右)、川上昌之さん(左)
から出荷直前のユリの育成状況につ
いて説明を受ける3県議



微妙な消費者の動きをチェックして試行
錯誤を繰り返し、新しい品種を開発。
あるいは従来品種をアレンジして、花を小
さくしたり、色を変えたり、バリエーシ
ョンを作り出して、消費者にアピールしてい
く。南房総の花弁産業は、そうした目に見
えない努力に支えられているのです。

おもてなしの心を咲かせる

割烹旅館・沖見屋の大広間では、夜の宴会
に備えて、玄関とはまた違った花を使った床
の間の準備に女将さんが追われています。
「熱海や箱根のように建物が立派なわけでは
ないし、温泉がわいているわけでもありま

